

# 看護師の完全主義傾向と過剰な共感が 共感疲労に及ぼす影響

○ 蔭谷陽子<sup>1</sup>・岩永 誠<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期, <sup>2</sup>広島大学大学院総合科学研究科)

## 問題と目的

看護師には患者の立場に立って患者の思いや苦しみを理解する能力(文部科学省, 2011), すなわち共感性が必要とされる。しかし, 患者の気持ちに強く共感することで患者に過度に関わることに加え, 患者からの感情伝染により看護師自身も患者同様の感情状態に陥り, 心理的苦痛から共感疲労を引き起こしてしまう可能性がある。看護師の共感性の高さは看護ケアの質と関連し(Olso, 1995), 患者への共感を通して患者と看護師の信頼関係が確立する(榎本, 1997)が, その一方で, 患者への共感がストレスとなる(田尾・久保, 1995; 荻野, 2005)。看護師のバーンアウトに陥りやすい個人要因として, ひたむきで自己関与が高く, 完璧主義, 理想主義的傾向が強い性格とされている(田尾・久保, 1996)。看護師の完全主義傾向は, 患者への過度なケアに結びつき, 結果として共感疲労を引き起こしてしまうと考えられる。そこで本研究では, 看護師の完全主義傾向と過剰な共感, 患者への過度な関与が共感疲労を引き起こす過程について検証することを目的とする。

## 方法

**調査時期・対象者:** 2017年7月~9月に質問紙調査を実施した(郵送調査法)。分析対象は看護師252名(男性14名, 女性238名, 平均年齢36.6歳(SD=10.97))であった。

**使用尺度:** 多次元共感性尺度(鈴木ら, 2000)6因子28項目, 新完全主義尺度(櫻井・大谷, 1997)のうち失敗過敏尺度・行動疑念尺度各5項目, 共感疲労関連尺度(今・菊池, 2007)4因子20項目, 患者への過度な関与に関する項目(1因子13項目)。いずれも6件法で回答させた。

**分析:** 重回帰分析, 因子分析にはSPSS ver. 11を用いた。

## 結果

**因子分析:** 使用した全ての尺度において因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。多次元共感性尺度は, 「他者心理の理解力」「自己指向的情緒反応」「想像性」「被影響性」「对人的情緒に対する態度」「冷淡性」の6因子が抽出された。

新完全主義尺度は, 「失敗過敏」「行動疑念」の2因子が抽出された。患者への過度な関与尺度は1因子であることを確認した。共感疲労関連尺度は「個人的苦痛」「共感的苦痛」「共感疲労」「共感の過剰喚起」の4因子が抽出された。各尺度において内の一貫性が確認された(多次元共感性尺度: $\alpha=0.733\sim 0.88$ , 新完全主義尺度: $\alpha=0.812, 0.793$ , 共感疲労関連尺度: $\alpha=0.688\sim 0.810$ )。また, 各尺度の因子得点と尺度全体の合計得点を用いた。

**重回帰分析:** (1)説明変数を共感性と完全主義, 患者への過度な関与, 目的変数を共感疲労の合計得点とし, 重回帰分析を行った。共感疲労に対して共感( $\beta=0.212, p<.001$ ), 完全主義( $\beta=0.253, p<.001$ ), 患者への過度な関与( $\beta=0.218, p<.001$ )は正の関連を示した。(2)共感疲労の下位因子ごとの検討を行うため, 目的変数を共感疲労の下位因子とし, 重回帰分析を行った(表1)。「個人的苦痛」に対して完全主義と過度な関与, 「共感的苦痛」に対して共感性・完全主義・過度な関与, 「共感の過剰喚起」に対して共感性と過度な関与が有意な関連を示した。「共感疲労」に対してはどの説明変数も関連していなかった。

表1 共感疲労の下位因子と説明変数の重回帰分析結果

	個人的 苦痛	共感的 苦痛	共感疲労	共感の過 剰喚起
共感性	0.050	0.206**	-0.038	0.298**
完全主義	0.318***	0.232***	0.096	-0.052
過度な関与	0.179**	0.182**	-0.084	0.212**
R <sup>2</sup>	0.191***	0.202***	0.011	0.146***

## 考察

看護師の完全主義傾向と共感性の高さと患者への過度な関与が共感疲労と関連していることがわかった。下位因子において, 「共感的苦痛」は共感性と完全主義・患者への過度な関与と関連しているものの, 「共感疲労」は各説明変数との関連は認められなかった。「共感疲労」の項目が, 残された家族や他の患者さんたちが幸せになることについてあまり気にならなくなったと思う。」といったように, 共感疲労というよりは気にしないようにするという脱人格化的対処といえる項目から構成されていたからだと考えられる。